

気、赤血球増加と大食といった事実を結びつけたのである (Burwell 811-18)。従ってディケンズは、医学的な解明が行われるおよそ1世紀以上も昔の段階で、そのような病気の存在に気がついていたのである。

- 2 ここで言うところの「眠り関連語」とは、‘sleep’, ‘slumber’, ‘doze’, ‘nap’, ‘dream’ といった言葉である。なお、例えば ‘dream’ には「眠り」と関わる意味での「夢」以外に、「将来の夢」というような意味として使われる場合もあるが、そのような事例はすべて除外した。また今回の調査には、*The Victorian Literary Studies Archive* 内の Hyper-Concordance を使用した。以下にその URL を記す (<http://www.victorian.lang.nagoya-u.ac.jp/concordance/dickens/>)。
- 3 パロイシアンによると、実際に多くの教区の奉公人たちは不潔で悪臭の漂う地面で寝かされ、当時酷く虐待を受けていたとのことである (Paroissien 72-73)。従ってこの棺桶の間に寝かされるという描写は、オリヴァーが奉公人になったからといって全く彼の置かれた状況が改善されたのではなく、彼の命はまだ危険にさらされている、という事実を強く感じさせる。
- 4 *The Oxford English Dictionary* によれば、‘nap’ は ‘a short or light sleep’, ‘slumber’ は ‘a light or short sleep’, ‘snooze’ は ‘a sleep, a nap’ と説明されており、これらはいずれも普通の ‘sleep’ よりも浅い眠りのイメージを内包する言葉である。
- 5 パロイシアンはこの場面が『マクベス』の ‘but now they rise again./ With twenty mortal murders on their crowns’ (Shakespeare 3.4.80-81) を思わせる、と述べている (Paroissien 264)。

### 引用文献

- Ackroyd, Peter. *Dickens*. London: Minerva, 1990.
- Burwell, C. Sidney, Eugene D. Robin, Robert D. Whaley, and Albert G. Bickelmann. “Extreme Obesity Associated with Alveolar Hypoventilation: A Pickwickian Syndrome.” *American Journal of Medicine* 21 (1956): 811-18.
- Collins, Philip. *Dickens and Crime*. 3rd ed. London: Macmillan; New York: St. Martin’s, 1994.
- Cosnett, J. E. “Charles Dickens: Observer of Sleep and Its Disorders.” *Sleep* 15.3 (1992): 264-67.
- Dickens, Charles. *Barnaby Rudge*. Ed. Donald Hawes. London: Dent, 1996.
- . *Martin Chuzzlewit*. Ed. Patricia Ingham. Harmondsworth: Penguin, 2004.
- . *Oliver Twist*. Ed. Steven Connor. London: Dent, 1994.
- . *The Old Curiosity Shop*. Ed. Paul Schlicke. London: Dent, 1995.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. Vol.1. London: Dent, 1948.
- Kettle, Arnold. *An Introduction to the English Novel*. Vol. 1. London: Gainsborough, 1951.
- Paroissien, David. *The Companion to Oliver Twist*. Edinburgh: Edinburgh UP, 1992.
- Shakespeare, William. *Macbeth*. Ed. Kenneth Muir. London: Methuen, 1953.

## フランス革命期を描く小説の歴史性 — 『二都物語』と『ラ・ヴァンデ』を中心に —

Historicity of the French Revolution Novels:

*A Tale of Two Cities and La Vendée*

矢次 綾

Aya YATSUGI

フランス革命は人々の歴史意識を呼び覚まし、<sup>1</sup>内外の思想に影響しただけではなく、19世紀に隆盛を極めた歴史小説にも恰好の題材を提供した。その証拠に、英仏の主要作家が第一共和制崩壊までのフランス革命期を題材に描いた小説として、バルザックの『ふくろう党』(*Les Chouans ou la Bretagne en 1799*, 1837)、トロロプの『ラ・ヴァンデ』(*La Vendée*, 1850)、ディケンズの『二都物語』(1859)、ユゴーの『九十三年』(*Quatre-vingt-treize*, 1874)などを挙げることができる。革命期の人々が「友愛か死か」という二者択一を共和主義者によって強要されたように、<sup>2</sup>これらの小説の主要人物は共通して、混乱の時代を背景に、生死を賭けた選択を迫られている。もっとも、上に挙げた英文学の二作は仏文学の二作よりも歴史小説としての評価が従来から低い。とりわけ『ラ・ヴァンデ』はトロロプの「最低の作品」(Hall 112)と見なされ、ルカーチの『歴史小説論』、アンドリュウ・サンダーズの『ヴィクトリア朝の歴史小説』、ハリー・ショアの『歴史フィクションの形態 — スコットとその後継者たち』といった歴史小説論では言及されてさえいない。それは、これらの二作において人物の選択と革命期を象徴する思想との関わりが仏文学の二作よりも希薄であること、そして、各々の作者がおそらく無意識的に19世紀のイギリスの状況を過剰に反映させている箇所が見られることなどによると考えられる。20世紀末にヒストリオグラフィック・メタフィクションが一潮流を創るなど、過去の歴史的な出来事 — それが起こった日付と場所と共に一般的に認識されている過去の出来事 — を扱う小説が多様化した現在において、歴史小説を論じるのに、ルカーチが課した「個人の運命と歴史の一般的な運動との有機的な繋がりを描出する」という命題を

評価基準にするのは偏狭であろう (Lukács 20)。描き込まれた過去に向けて読者の意識を喚起する小説を広く歴史小説と呼びたいと思うが、そう考えるにしても、特に『ラ・ヴァンデ』は王党派の反乱が起きた18世紀末という過去に読者を誘うだけの歴史性が乏しいように見える。

だからといって『ラ・ヴァンデ』は取り上げるに足る小説ではないと断ずることはできない。一つには、齋藤が述べているように、『ラ・ヴァンデ』を引き合いに出すことによって、ディケンズがフランス革命のどのような側面に着目して『二都物語』を描いたかを意識することができる (齋藤 20)。二点目として、スコットに刺激されて多くの小説家が歴史小説を描いた文学史的背景において、フランス革命とその余波が本国フランスと隣国とでいかに物語られたかを比較検討するための題材の一つにすることができるからである。本稿では、『ラ・ヴァンデ』が批評の対象にほとんどなっていない理由を検証した上で、『二都物語』も合わせて、以上に挙げた第二点目について考察したい。その際に、トロロブとディケンズがそれぞれ創造したアンチ・ヒーローのドゥノー (Adolphe Denot) とカートンに着目する。なぜなら、彼らは革命期を背景に生死を賭けた選択を迫られると同時に、19世紀半ば以降のイギリスの精神的動向を暗示しているからである。

### 1. 『ラ・ヴァンデ』における王党派の視点

結論を先に述べるなら、18世紀末のフランスにおける動乱という過去の出来事に向けて読者の意識を喚起する歴史性が『ラ・ヴァンデ』において乏しい要因は、王党派に固定化された視点にある。ディケンズがカーライルの『フランス革命』(*The French Revolution*, 1837) に影響されて『二都物語』を執筆したように、トロロブはヴァンデ軍統率者の夫人が描いた『ラロシュジャクラン侯爵回顧録』(*The Memoirs of the Marquise de La Rochejaquelein*, 1815。以下『回顧録』と略記) に強い影響を受けて『ラ・ヴァンデ』を執筆した<sup>3</sup>。ディケンズがカーライルに傾倒しすぎたために、領主権と封印状の濫用を除いて、フランス革命の原因を飢えや困窮の問題に限定しているように、トロロブは『回顧録』を信頼しすぎたことにより、王党派以外の視点を全くと言っていいほど考慮に入れていない。また、トロロブは革命を嫌悪するヴィクトリア朝中期の読者を意識し過ぎたあまり (Fleishman 177)、革命勃発の必然性やその意義についての言及を避けている<sup>4</sup>。さらに、トロロブは、ジャコバン派指導者ロベスピエールを描く第23章および第24章と主に1815年のパリの様子を描く最終章とを除いて、ヴァンデの王党派が革命前の秩序を踏襲する姿を描くのに終始したために、フランス革命が招いた混乱を表現しているという印象が薄い。これ

は、ディケンズが『二都物語』で日常化したカーニヴァルを描くことによって、未曾有の歴史的混乱を表現したのと対照的である<sup>5</sup>。『ラ・ヴァンデ』には、王制が廃止され、キリスト教が否定されたことによる道徳的な亀裂が見られないのだ。例えば、民衆は共和政府の徴兵制度に反発し反乱を勃発させる (20–24) ことがあっても、軍制の中で民衆が貴族に従うのは当然のことと見なしている。その傍証であるかのように、御者のカトリノー (Jacques Cathelineau) は、レスキュール (Charles de Lescure) をヴァンデ軍将軍に推す際に、その理由の一つとして、軍人として訓練された貴族にこそ将軍としての資格があることを挙げている (159)<sup>6</sup>。また、本格的な戦いを前にジェローム神父 (Father Jerome) が共和国政府に対する戦いは神の意思と説くのを始めとして (47)、キリスト教はヴァンデ軍の精神的な支柱としての役割を果たし続ける。以上より、『ラ・ヴァンデ』の読者は絶対王政以前の諸侯の覇権争いの一端を垣間見ているような印象を度々受けるのである。

主要人物の視点に賛同するのがトロロブの特徴という指摘の通り (Mullen 218)、三人称の語り手の視点は王党派のそれと一致している。その一例として、共和制発足という歴史の転換について語り手が述べたコメントを挙げよう。

patriotism in France began to totter, and that, from that time, Paris ceased to be a fitting abode for aught that was virtuous, innocent, or high-minded; but the steady march of history cannot stop to let us see the various lights in which the inhabitants of Paris regarded the loss of a King, and the commencement of the first French Republic. (7)

「パリは高潔で志高き者に相応しい住みかではなくなった」という部分に呼応するかのようになり、カトリノー亡き後のヴァンデ軍将軍ラロシュジャクラン (Henri Larochejaquelein) は「もはやパリは我々が住むべき場所ではない」と述べ (16)、同志と共にヴァンデ地方の領地へ戻っていく。この例の他にも、語り手は、ヴァンデ軍が行った虐殺行為には触れないなど王党派に肩入れしている<sup>7</sup>。ヴァンデの女性たちも王党派の兵士たちと同じ視点を共有している。ラロシュジャクランの妹アガサ (Agatha) は、思慕の情を寄せるカトリノーの死を、王権奪回という大義名分を持つ戦いにおける高貴な死と見なし、その死を悔いていないと彼の母親に対して明言する (376)。要するに、革命勃発後も旧制度の秩序と倫理観が生き残り、王党派以外の視点がほとんど示されないのが、『ラ・ヴァンデ』の世界である。『ラ・ヴァンデ』は、『二都物語』第三部がパリを舞台にしているのに対し、地方を舞台にしている。そうした相違もあって、

読者は歴史の転換期を迎えた人々が描かれているという印象を受けにくいのである。

より正確に言うならば、駆け出しの作家であったトロロプが歴史小説の題材としてヴァンデの反乱に着眼したのは、『回顧録』そのものではなく、それを英訳したスコットが英語版の序文に記したコメント—「ヴァンデ軍が起こした内戦は、フランス革命における最も興味深い出来事の一つである」—に感銘を受けたためである (Hall 112)。ただし、このようにヴァンデの反乱を評したスコットの本心を、トロロプは理解していないように思える。なぜなら、スコットがこのように評価したのは、彼自身が小説の中で採用しているのと同じ国内における被植民者としての視点を『回顧録』に見出したからだ<sup>8</sup>。それにも関わらず、トロロプの描写には、フランス西部というケルト的な土地柄を持つ中央政府に対する反発が見られない。そのためか、『ラ・ヴァンデ』に登場する農民はイギリスの自作農のように見えることがある (McCormack xi)。トロロプはスコットから歴史小説の題材に関して表面的な示唆を受けたに過ぎないのである。ユゴーが同じくヴァンデの反乱を題材にしている『九十三年』と読み比べても、トロロプの認識不足は瞭然として明らかだ。なぜなら、ユゴーは『九十三年』第一編などで農民がゲリラ戦を展開する特異な自然環境を描くと同時に、ヴァンデ軍を率いるラントナック (Lantenac) をブルターニュ公、すなわちブルターニュというフランス国内の異郷の王と位置づけ、反乱が起きた地方の中央政府に対する反発の根強さを構築しているからである。

## 2. ドゥノーの葛藤

以上のように、『ラ・ヴァンデ』の人物たちは絶対王政期の倫理観を保持している。その中でドゥノーだけが個人的な感情に従って行動した結果、君主主義と共和主義という1790年代初期に分立した二つの主義の間を行き来することになる。君主主義と共和主義に限らず、二つの主義もしくは主張の間で揺らぐ人物像は、本稿冒頭で挙げたその他の小説にも見られる特徴である。王制やキリスト教が提示していた倫理的基準が革命によって破壊された結果、人々は革命前には不要だった倫理的決断を自分自身で行うことになった。ピーター・ブルックスは、このような決断をする人物を劇化する際に「表象の過剰と、人物たちの意識に影響する強力な道徳的主張」という要素が表出すると指摘して、これを「メロドラマ的モード」と呼び (Brooks xiii)、革命期をこのモードが生じた時期と見なしている。まさしくドゥノーは、革命期に対峙した主義の間を彷徨しながら、「メロドラマ的モード」を体現する人物なのである。

とはいえ、ドゥノーは自分を拒絶したアガサへの個人的感情から二つの立場

の間を行き来したのであって、君主主義と共和主義がそれぞれ依存する原理に影響されたわけではない。これはユゴーの『九十三年』やバルザックの『ふくろう党』において人物たちの葛藤と時代の提供する主義とが密接に関係しているのと大きく異なっている。『九十三年』における元僧侶で厳格な共和主義者のシムルダン (Cimourdain) と共和国軍の指揮官で元貴族のゴーヴァン (Gauvain) は、共和主義者として果たすべき役割と人道的な見地 (もしくは個人的な愛情) から取るべき行動とが相矛盾しているために葛藤する (第3部第6編第2章～第7編第2章)。そして、ゴーヴァンが共和主義ではなく人道的な立場から下す倫理的選択こそ、ユゴーの考える、フランスが未来に向けて下すべき決断である。ヴァンデの反乱の約6年後を描く『ふくろう党』では、共和政府の密偵ヴェルヌイユ (Marie de Verneuil) とふくろう党の首領モンローラン (Montauran) が、愛し合いながらも各々の政治的な立場ゆえに葛藤を強いられる (第31章)。バルザックは、両者が最終的に迎える破滅的な死の中に、第一共和制と反革命運動双方の行き詰まりを描き込んでいるのだ。要するに、ユゴーとバルザックは革命期に優勢だった主義を象徴する人物たちが葛藤する姿を描き、その葛藤を革命の進展と密接に関連づけているのである。

ヴァンデ軍と共和国軍の間でのドゥノーの揺らぎには、思想的もしくは政治的背景との関連性がほとんど見られない。小説家のヒュー・ウォルポールが1920年代に『ラ・ヴァンデ』再評価の動きを見せているが、彼が評価の理由として挙げているのは、ドゥノーの臆病な気質がうまく描かれていることに加え、ドゥノーと彼を巡る人物たちが陥った心理状態に普遍性が見られることである (Walpole 40–41)。ウォルポールはこれらの点を実証するために、ドゥノーが共和政府の司令官サンテール (Antoine-Joseph Santerre) と共にラロシュジャ克蘭家の居城を襲撃し、拘束したアガサと対面する場面を挙げている。この場面でドゥノーは征服者としての自分の力を誇示しながらも、アガサと目を合わすことができない (258–59)。これはウォルポールの指摘に従うなら、ドゥノーの臆病さのゆえということになるが、彼がアガサに向けた言葉の中で「俺の剣は祈りの言葉よりも強力だ」と述べていることを考慮するなら、その心の動揺には、彼が自分を拒絶した女性にただ復讐するのではなく、共和国軍の一員として彼女を殺害しようとしていることが大きく影響している。そんなドゥノーの複雑な心境を目の当たりにしているために、サンテールは、自分がまさに遂行しようとしている任務—ラロシュジャ克蘭家の城を破壊し、その家族を殺害するという任務—がパリの群衆を扇動して殺戮行為へと駆り立てることや、国王の処刑に立ち会うことよりも困難だと感じるのである (259–60)。要するに、ヴァンデ戦争の一場面という背景があるからこそ、ドゥノーのアガ

アンピヴァレンス  
 サに対する思慕と憎悪が混在した両価感情や、彼を巡る人物たちの心理状態が劇的に描かれていると十分に考えられる。

ドゥノーがアガサに復讐するために、共和国政府の一員としてラロシュジャクラン家の居城を襲撃しなければならない理由として、身分制度や家族制度に対するドゥノーの複雑な反応を読み取ることもできる。架空人物のドゥノーは資産家だが、出自が明らかでない孤児として設定されている(11)。ラロシュジャクラン家で育てられた彼は、アガサとの結婚によって名実共に貴族の一員になれたはずだった。彼の経歴と将来への希望は、大いなる遺産の見込みを得てジェントルマンになり、エステラとの結婚を夢見たピップのそれと類似している。しかも、ピップが労働者階級の一員としての過去から逃れ、ジェントルマンであることに固執したように、ドゥノーも上流階級への帰属意識が強い。例えば彼は、将来の妻になるはずのアガサが弾薬を扱い、貴婦人らしい白い手が汚れることへの嫌悪感や(52)、御者のカトリノーが将軍に選出されることへの抵抗感をあからさまに示している(169)。ドゥノーのこのような側面は、共和制樹立による身分制度の崩壊ではなく、19世紀半ばのイギリスにおける階級の流動性を象徴しているのである。フランス革命期を題材とする小説に19世紀的な人物を描き込むのは、フランス革命期を生きる人間に対する作者の無理解を暗示する否定的な要素と言えらる。実際に、トロロブはヴァンデ地方に関する自分の無知を自伝(*An Autobiography*, 1883)の中で率直に認めている(Hall 112; McCormack viii)。それでも、懐疑的な孤児のドゥノーが、貴族の嫡男ラロシュジャクランのアンチテーゼとして描かれて作品に心理的な深みを与え、ホールによる「一方的な聖人伝」という『ラ・ヴァンデ』に対する酷評を退けるのに、一役買っていると考えられる(Hall 112)。清廉潔白で人を疑わないラロシュジャクランはカトリノー亡き後のヴァンデ軍将軍として後世に名を残す実在の人物で、共和主義的な平等の精神を受け容れたかのように、カトリノーを将軍として認めるのにやぶさかではない。そのようなラロシュジャクランに対して、ドゥノーはその名前(Denot)が否定性もしくは陰性を連想させるように、アンチ・ヒーローの役を担っているのである。

### 3. カートンの選択

『ラ・ヴァンデ』のドゥノーに相当する『二都物語』のアンチ・ヒーローは、カートンである。カートンは自分がルーシーに愛されるダーネイに対極にあると考え、自分自身に嫌悪感を抱いている。カートンがそのような感情を露呈させるのは、ダーネイがスパイの嫌疑をかけられた裁判の後で、自分の姿を鏡に映し、以下の台詞を吐く場面である。

why should you particularly like a man who resembles you? There is nothing in you to like; you know that. Ah, confound you! What a change you have made in yourself! A good reason for taking to a man, that he shows you what you have fallen away from, and what you might have been! Change places with him, and would you have been looked at by those blue eyes as he was, and commiserated by that agitated face as he was? Come on, and have it out in plain words! You hate the fellow. (89)<sup>9</sup>

引用最終行の「おまえ」が憎んでいる「あの男」は、理想像から転落してしまった自分自身ではなく、そうなるはずだった自分を具現しているダーネイを指すと解釈できるが、ディケンズは cartoons の否定的な自己認識を表出させることにより、彼が18世紀末というよりも19世紀半ば以降に心情的に属していることを暗示しているとも考えることも可能である。このような cartoons の特質は、弁護士仲間のストライヴァーとの比較からも明らかだ。ストライヴァーは、「誰の中にも誰の話にも割り込んでいく」貪欲さと(83)、「努力する人」(striver)という名前が暗示するように、ヴィクトリア朝的な自助の精神を戯画的に体現する人物である。一方の cartoons は彼に比べれば自分など「存在しないも同然」と自嘲的に考えている(94)。しかも、ストライヴァーが百獣の王ライオンに喩えられる一方で、cartoon は腐肉を漁るジャッカルに喩えられている。これらをストライヴァーと cartoons 各々の自己像だと解釈するなら、cartoon は自身をジャッカルと見なすことによってメランコリーの傾向を示していると言える。そんな cartoons の先達者は前作『リトル・ドリット』の自己否定的な主人公クレナムである。クレナムはペットに惹かれる自分の気持ちを抑えるために「幸福感にも傷心にも無感覚であること」(第1巻第16章)を望むのだ。クレナムと cartoons が示す自我不在による無気力は、彼らの後継者である『互いの友』のレイバーンに至って、19世紀末の特徴である倦怠感へと推移する。スマイルズが『自助論』(*Self-Help*, 1859)を出版して好評を博したのと同年に出版された『二都物語』の中で、ディケンズは世紀末の倦怠感を読者に予見させ、ヴィクトリア朝の肯定的な時代精神である自助の精神のアンチテーゼを提示しているのである。<sup>10</sup> もっとも、『二都物語』がフランス革命期を描く歴史小説であることを考慮するなら、ディケンズが cartoons を通して19世紀的な精神の動向を示唆することは、卓見ではなく、歴史小説家としての逸脱だと解釈されるであろう。また、cartoon が19世紀的な人物であることは、サンダーズの指摘する『二都物語』の評価が低い理由 — ディケンズにとって歴史は現在ほど差し迫った問題ではなかったこと(Sanders 95) — の傍証の一つだと捉える

こともできる。

ディケンズは、カートンがダーネイの死刑判決前夜にパリの街を彷徨する場面において、彼の無気力と、恐怖政治下の民衆を革命輪舞や虐殺行為へ駆り立てる感情とを関連づけている。カートンは彷徨を始める前に、ダーネイの身代わりとして死ぬ決意を既に固めている。その証拠として、カートンがダーネイと入れ替わる際に必要なバーサッドの協力を取り付けていることと (317)、彷徨の途中で「イエスのたまいけるは、われは復生なり」という彼が (John 11:25) 断頭台上がる際に唱える (389) 聖書の一節を思い出していることが挙げられる (325, 326)。彷徨の最後にセヌ河岸に至ると、カートンは渦が海の方へ流されていくのを見て「俺のようだ」と呟く (327)。ボールドリッジによれば、革命や暴徒を象徴する海へ流される渦と自分自身とを重ね合わせる彼の呟きは、死して救済者になろうとしている彼の道程と、「友愛か死か」のスローガンの下で個人的な主義主張を廃した集団として「この世のユートピア」を目指す革命の取る道程とが、相等しいことを示している (Baldrige 648-49)。しかし、カートンが、共和主義者の提示する「友愛か死か」という二項対立の中でのみ意味を成す「友愛」を否定するために、残された選択肢である「死」を選んでいくと解釈するならば、彼が渦に重ね合わせた自分は、自発的に「死」を選ぼうとしているその段階での自分ではなく、無気力に流されるままに生きてきた過去の自分ということになるだろう。カートンが共和国政府の提示する「友愛」を否定しようとしていることは、マネット家のために尽力し、その行く末を憂えて涙するロリーを「本当の友人」と呼び、ロリーが体現するものこそを真実の友愛と見なしていることから明らかである (320)。以上のように考えた場合、ディケンズはカートンに「友愛か死か」という二項対立の「死」を選択させることによって、共和国政府が提示する「友愛」の偽善性を暴いている。そして、民衆が個人的な意思を捨て革命という時流に同調している状態と、カートンが意思を持たず怠惰に生きていた時の状態との間には奇妙な類似点があることを仄めかしているのである。

#### 4. 歴史的な出来事からの距離

ディケンズとトロロプは『二都物語』と『ラ・ヴァンデ』の主要人物に19世紀的な気質を付与すると同時に、革命によって従来の倫理的基準が破壊された中で、主要人物が革命勃発前には不要だった倫理的決断を行う姿を描いている。『二都物語』のカートンは共和国政府の提示する「友愛」を否定して「死」を選ぶ。その一方で、『ラ・ヴァンデ』のドゥノーは援軍の大將としてヴァンデ軍に回帰し、ヴァンデ軍の指揮官にドゥノーを選出するのを阻んだレスキュ

ールも (167) 感嘆する働きをした後に戦死する (412, 425)。王党派の視点から描かれた『ラ・ヴァンデ』において、ドゥノーの回帰は取るべき倫理的決断である。

カートンやドゥノーと動揺に、『ふくろう党』のヴェルヌイユとモンローランや『九十三年』のゴーヴァンも、決断の結果として命を落としている。要するに、バルザック、ユゴー、ディケンズ、トロロプは共通して、人間の一度だけの生が歴史の流れにいかにして対抗するかを例証しようとしたと言えるが、英文学の二人の小説家と仏文学の二人の小説家とは描き込んだ歴史との距離の取り方に違いがある。バルザックは小説の結びとして、かつてのふくろう党員の1827年における姿を描いているが、1827年は『ふくろう党』出版のわずか10年前である。すなわち、バルザックはふくろう党員が未だ存命し、彼らがゲリラ戦を繰り広げた時代を、過ぎ去った過去として片付け難い段階で『ふくろう党』を執筆した。『ウェイヴァリー』(Waverley, 1814)に副題「約60年前の歴史物語」(“'Tis Sixty Years Since”)を付すことによって60年以上前の出来事を歴史と見なしたスコットの影響力が大きかった19世紀に、バルザックは新たな歴史観—現在に限りなく近い過去も歴史とする見方—を提示しているのである。これは、政治体制が目まぐるしく入れ替わる歴史の只中にあったバルザックが、時間の流れについて独特の感覚を獲得していたことを仄めかしている。ユゴーは『九十三年』に描き込んだ歴史と自分自身との関係を考察している。彼は自身が1848年以降に取った政治的立場を『九十三年』に色濃く映し出しているのだ。メールマンによれば、かつて王党派だったユゴーは、六月事件をきっかけに思想的転身を図って共和主義者になり、革命勃発以後の歴史を再検討した (Mehlman 45-46)。その一環として『九十三年』を執筆し、人道主義的な共和主義者のゴーヴァンの姿にフランスの未来を託したのである。ユゴーは、共和主義よりも人道的な見地を優先したために処刑されるゴーヴァンに、処刑に際して「共和主義万歳」と叫ばせる (第3部第7編第6章) ことにより、共和主義者が人間性を身につけて再生することへの希望を表明しているのである。

それに対して、英文学の二人は共に、各々が描いてきた歴史と彼ら自身との距離を置こうとしている。ディケンズは、カートンがルーシーの息子として再生し、新たな歴史を形成するであろうことを仄めかしているが (390)、カートンをパリではなくロンドンで再生させることによって、革命のその後の展開とは距離を取っている。トロロプは1815年を描く『ラ・ヴァンデ』最終章に、ドゥノーがヴァンデ軍に再合流する際の同行者で、後にふくろう党員として反革命運動を繰り広げたブルーム (Auguste Plume) を登場させ (438)、ヴァン

デ軍敗北後の反革命の歴史を辿っている。そして、小説最後の段落で執筆時期の1848年の視点から第二共和制が発足するまでの歴史を総括しているが、トロロブは一定の時間が流れたことを表現することによって、ヴァンデの反乱から距離を置いた自分の立場を示唆している。彼等の姿勢は、ヴィクトリア朝中期の人々がフランス革命に対して取った態度の一つを象徴していると考えられるだろう。

### 注

- 1 ルカーチは『歴史小説論』(1937)において、フランス革命とナポレオン戦争がヨーロッパの人々の歴史認識に与えた影響の大きさを指摘している (Lukács 23)。
- 2 フランス革命のスローガン「自由、平等、友愛」における「友愛」は、恐怖政治期になると、「しからずんば死」を付け加えた「友愛か死か」という「兄弟か敵か」を見極める二項対立の中で用いられることが多かった (David 145)。
- 3 トロロブ同様にスコットを敬愛したバルザックの『ふくろう党』の方が『ラ・ヴァンデ』よりも歴史小説としての評価が高い (Mullen 220)。その理由は、本稿で述べたように、『ラ・ヴァンデ』よりも『ふくろう党』の方が歴史的危機の全体像が伝わりやすいためであろう。
- 4 ヴィクトリア朝中期の人々はフランス革命を嫌悪し、同規模の混乱がイギリスでも起きるのではないかと懸念していた (Gorniak 26)。
- 5 『二都物語』におけるカーニヴァルの日常化については矢次 1-2 頁を参照。
- 6 『ラ・ヴァンデ』からの引用は下の引用文献に挙げたオックスフォード版から。
- 7 実際にはヴァンデ軍は虐殺行為を行っている。彼らが500人以上の市民を殺害したマカクル (Machecoul) の虐殺は、反革命軍の残虐さの典型として共和主義者によって語り継がれた (Schama 692-93)。
- 8 スコットの被植民者意識についてはカーを参照 (Kerr 3)。
- 9 『二都物語』に関する引用は下の引用文献に挙げた2003年発行のペンギン版から。
- 10 ブリッグスは、『自助論』に加え『種の起源』(*On the Origin of Species*) や『自由論』(*On Liberty*) 等が出版された1859年をヴィクトリア朝の転換期と見なし、心理学者で性科学者のエリス (Havelock Ellis) の言葉を引用して、「種々の既成概念に対して人間精神が奮起を促された年」と述べている (Briggs 306-07)。

### 引用文献

- Baldrige, Cates. "Alternatives to Bourgeois Individualism in *A Tale of Two Cities*." *Studies in English Literature* 30 (1990): 633-54.
- Briggs, Asa, *Victorian People: A Reassessment of Persons and Themes, 1851-67*. 1954; Harmondsworth: Penguin, 1995.
- Brooks, Peter. *The Melodramatic Imagination: Balzac, Henry James, Melodrama, and the Mode of Excess*. 1976; New Haven: Yale UP, 1995.

- David, Marcel. *Fraternité et Révolution Française, 1789-1799*. Paris: Aubier, 1987.
- Dickens, Charles. *Little Dorrit*. 1855-57; Harmondsworth: Penguin, 1985.
- . *A Tale of Two Cities*. 1859; Harmondsworth: Penguin, 2003.
- Fleishman, Avrom. *The English Historical Novel: Walter Scott to Virginia Woolf*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1971.
- Gorniak, George. "The English Revolution." *The Dickens Magazine* 3.4 (2005): 26-28.
- Hall, John N. *Trollope: A Biography*. Oxford: Clarendon P, 1991.
- Kerr, James. *Fiction against History: Scott as Storyteller*. 1989; Cambridge: Cambridge UP, 2006.
- Lukács, Georg. *The Historical Novel*. 1937. Trans. Hannah and Stanley Mitchell. 1962; London: Merlin, 1989.
- McCormack, W. J. "Introduction." *La Vendée*. Oxford: Oxford UP, 1994.
- Mehlman, Jeffrey. *Revolution and Repetition: Marx, Hugo, Balzac*. Berkeley: U of California P, 1977.
- Mullen, Richard. *Anthony Trollope: A Victorian in his World*. London: Duckworth, 1990.
- Sanders, Andrew. *The Victorian Historical Novel 1840-1880*. 1978; New York: Palgrave, 2001.
- Schama, Simon. *Citizens: A Chronicle of the French Revolution*. 1989; New York: Vintage, 1990.
- Shaw, Harry E. *The Forms of Historical Fiction: Sir Walter Scott and his Successors*. 1983; Ithaca: Cornell UP, 1985.
- Trollope, Anthony. *La Vendée*. 1850; Oxford: Oxford UP, 1994.
- Walpole, Hugh. *Anthony Trollope*. London: Macmillan, 1929.
- 齋藤九一. 「ディケンズの『二都物語』とトロロブの『ラ・ヴァンデ』」, 『ディケンズフェロウシップ日本支部年報』第25号(2002年): 19-28頁.
- 矢次綾. 「『二都物語』におけるカーニヴァル — 革命空間の集団および個人」, 『中部英文学』第26号(2007年): 1-13頁.
- バルザック, オノレ・ド. 『ふくろう党』. 桑原武夫他訳. 東京: 創元社, 1961年.
- ユゴー, ヴィクトル. 『九十三年』. 辻昶訳. 東京: 潮出版, 2003年.